

宗教の超越的視点からの自己実現概念の構築に関する研究

— 古代インド仏教思想の自己実現概念 —

日本ソーシャルワーク研究会 清重哲男(01709)

ルーテル学院大学大学院付属包括的臨床死生学研究所

[キーワード] 自己実現 仏教 社会福祉、精神

1. 研究目的

本研究は、宗教的視点から自己実現を論じた先行研究を調査分析し、宗教的要素を含めた人間の精神の永遠性から高齢者の自己実現概念の構成要因を明らかにすることを目的とする研究である。

多くの社会福祉研究では、宗教性を除外した研究が多いが、本研究は、宗教性を取り入れて、自己実現概念を確立しようとする研究である。筆者のこれまでの研究から、自己実現概念には宗教性が必要であることを確信したからである。

2. 研究の視点及び方法

先行研究の調査は、国立国会図書館所蔵の論文及び書籍の先行研究調査N D L - O P A C（書誌一般表示）の「書誌検索」「雑誌記事索引」に登録された「自己実現」の先行研究を検索し、高齢者の自己実現概念の理論構築に重要と思われる論文等を抽出した。2010～1994年の17年間から247件、書籍文献、1999～1995年の5年間から35件の論文等を合計312件を調査し、自己実現に関する重要と思われる文献48件を抽出した。その中から宗教的視点で自己実現を論じた重要文献を中心に調査研究を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、研究者として、個人情報に倫理的配慮をしています。本研究で参考とした先行研究文献等は、著作権の保護に適切に従って、使用しています。これらは研究目的の自己実現概念の構築の目的以外に使用しないことを誓約します。

4. 研究結果

(1) 曼荼羅(まんだら)(古代インドを起源とし、サンスクリット語で輪円(mandala)という意味である。)

ユングは、患者の臨床体験からチベット仏教の曼荼羅の世界が、最高の自己実現の世界を著していると述べている。

曼荼羅とは、「仏教の本質を象徴する」つまり仏の悟りそのものである。世界観などを視覚的・象徴的に表したものである。

ユングの理論は、非常に仏教の教えに近いものがある。特に自己実現はその一つである。

図1 曼荼羅の例示



出典：<http://www.munguntibet.com/cgi-bin/>「曼荼羅(曼陀羅)とは」

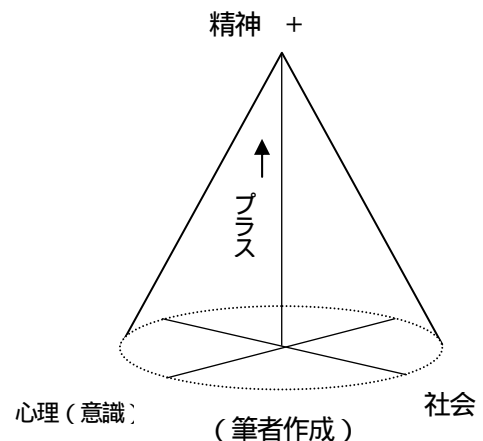
(3) 仏教的人間像の理想

仏教的人間像の理想は「心と体からなる平面の面積についてとかくいうのではなく、タテに精神がプラスの方向に進み、それが無限大の高さに到達すること」である。

立体的な容積がプラスの方向に増大することが重要である。精神は主体的なことをいい、心理は客観的なことをいう。心理を横の平面で表すと、精神はタテの面の世界のこととなる。ヤスパースは、人格的なタテの精神医学が必要であることを最初に提示した。

ユングは、これを自己実現の世界といった。

図2 精神と心の関係構造



マズローの自己実現の概念は、大乘仏教思想の影響を受けて形成された可能性が高く、禅者である佐藤幸治によれば、マズローは禅に注目しその理解を深めていたのである。

(2) カルマ論

全宇宙は、一個の自己実現システムであるとカルマの教えでは説いている。カルマとは、実は調整し、均衡を取り戻し、補償的なバランスをもたらすために行使される<宇宙精神>(神)の力である。われわれは、全員が<超自己>として、一体であることを、結局は知ることになる。われわれの各々は、自分自身の幸福だけでなく、他の人々のそれを等しく考慮しなければならない。

カルマは、思考の形成物の集まりであり、また、これらすべての形成物を結びつけている統一的規定としての<世界精神>があるがゆえに作用力としてのカルマの可能性が存在している。

古代ギリシャのプラトン哲学者たちはそれを「運命 destiny」と呼び、古代ローマのストア哲学者たちはそれを「宿命 fate」と呼んだ。インド人の仏教徒とヒンドゥー教徒はそれを「カルマ」と読んでいた。

注)カルマとは、サンスクリット語で、「行い」「行為」「作業」の意味であり、仏教用語では、「人の行為」「業」といわれている。

(3)「無我=アナートマン」

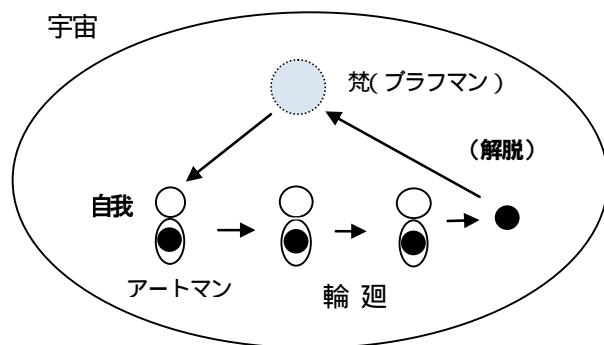
釈尊が修業で、「無我=アナートマン」である、実在(=アートマン)ではないということを知った。アートマンとは、自我(自分のこと)をいれ、個々の人間の自我が、宇宙の究極の根源であると説く。釈尊は、「アートマンは、実在である」という伝統的なこの考え方を真っ向から否定したのである。

仏教の因縁論は、「自我によって他者が成り立ち、他者によって自我が成り立つ」という教えである。このことは、自己実現の基本要素の1つであるといえる。自我は永遠不滅の実態ではなく、仏教の最も重要な思想の一つである。「一切の存在は常に変化流転して、止まない。」つまり、無常ということである。

業・輪廻の思想は、インドで、BC 700~500年頃に、が確立した。その思想は、「人間は生存中の行為(業とは行為をいう)に応じて、死後の在り方が決まり、よい行為をなしてきたものは死後は幸福な生活ができ、悪い行為をなしてきたものは、恐怖と苦しみの生き方しかできない」という考えである。

ブラウマンは、個を超えて、超越的、客観的である。アートマンは、解脱して、ブラウマンに到達できる。

図3 仏教のアートマンとブラウマン



(筆者作成)

【引用・参考文献】

大野整一(1987)「仏教と自己実現」 生きるための哲学としての仏教 惺惺塾
 岸本謙一(1985)「自己実現の道」 精神医学からみた仏教的人間像 仏教伝道協会実践布教友の会
 Paul Brunton(1998). *WHAT IS KARMA*. The Brunton Philosophic Foundation (=2001 大野純一訳)
 『真の自己責任と自己実現の教えとしての新カルマ論』コスモス・ライブラリー)
 Madeleine Kim(1980) . *Der Einzelne Und Das Allgemeine Zur Selbstverwirklichung des Menschen bei Soren Kierkegaard* , R. Oldenbourg K.G. (=1988 酒井一郎訳『単独者と普遍-キルケゴールにおける人間の自己実現への道-』東京大学出版会)
 「曼荼羅(曼陀羅)とは?」: <http://www.munguntibet.com/cgi-bin/>
 駒井洋編(1987)「自己実現社会」有斐閣書
 杉本圭子(1966)「ゴールドシュタインの自己実現概念に基づく生活史分析の試み」人間心理学研究 第14巻1号 50-62
 川元克秀(1998)「高齢者を対象とした福祉サービスの効果的に『自己実現』概念を用いるための測定度の検討」社会福祉学第39-1号(通巻58号)
 人間主義心理学会編集代表 上田吉一(1999)「人間の本質と自己実現」川島書店